

帝塚山学院大学五〇周年記念誌

もう一度、高く旗を掲げよう

学長 津田 謹輔

学校は、教えたい人がいて、そこに学びたい人が集まる。本学は帝塚山学院の建学の精神である、「力の教育」の旗のもと、一九六六年四月四年制女子大学として発足した。わが国の高度経済成長のまただ中であった。一期生が卒業した一九七〇年は戦後復興から続く経済成長のシンボルである大阪万博が開催された年であり、卒業後万博コンパニオン(当時このように呼ばれていた)として活躍した方も多い。ちょうどその頃は第二次ベビーブームといわれ、出生数は現在のおおよそ二倍の二〇〇万人を超えていた。一九九二年ころまでは一八歳人口も大学受験者数もまさに右肩上がりに増加していた。その後バブル景気の崩壊など日本をとりまく様々な環境の変化が、大学にも様々な影響をもたらしてきた。

教育や医療といったまさに人間を対象にした領域にも経済、経営といった視点が導入されてきた。とりわけ少子化の進行にともない、大学は、社会や学生のニーズに合わせざるを得なくなり、改革につぐ改革が行われ、そうしなければ生き残れないとさえ言われている。このことは現実問題として直視しないといけないのであるが、卒業生の立場で考えると、自分が育った大学はあっても自分の学部は消滅していることもおこっている。本学でもしかりである。改革のなかで、大学それぞれの特徴がうすれてきているのではないだろうか。改革をしていくべきところと残し続けなければならないものがある。今こそ建学の精神の旗をもう一度高く掲げよう。

大学が預かる学生は、ほとんど二〇歳前後の若者である。昔は元服により社会に仲間入りした時代もあるので、青年期に学ばねばならないことも、時とともに変遷するのかもしれない。しかし若者が身につけないといけない基本は変わらないであろう。

生物にはそれぞれ固有の生活史ライフヒストリーがある。ヒトの生活史には、他の哺乳動物にはない、いくつかの特徴がある。ヒトには長い老年期があることも一つの特徴であるが、最も特徴的なのは、ヒトは、大変未熟な状態で生まれてくることである。生まれて数時間で立ち上がり、自分の足で歩き始める動物もいるが、ヒトは歩き出すにも一年の月日を要する。すなわちヒトは自立するのに長い年月がかかる。長い発育期があり、少年期、そしてその後青年期と呼ばれる時期が明らかにあることも大きな特徴である。

ヒトの脳もまた、生後ゆっくりと成熟していく。最近では、fMRI (functional MRI) など脳の働きを画像でみることが出来る。この機器を用いて脳の成熟度をみた研究がある。脳の機能は局在しているが、脳の異なる部位の間の機能的接続の成熟度を測定した研究では、ヒトにおいては二〇〜二五歳までゆるやかに発達するという結果が得られている。ヒトに最も近いチンパンジーの脳の成熟が比較的早く終わるのと対照的である。

このようにヒトの脳が、長い時間をかけてゆるやかに成熟するのは、人類が高度に複雑な社会を形成しているので、社会性を獲得し、さまざまな社会行動を学ぶのにも、より長い時間を必要とするからと考えられている。

したがって、青年期に学ぶことは、社会が求めている知識、学力を身につけることと、社会性を獲得することにあると考えられる。これは変わらない大学で学ぶべき課題であろう。

知識、学力は毎日の授業で鍛えられ、その成果は比較的目に見える形で、また数値化することもできる。しかし、一方の社会性獲得というのは目に見えにくい。わが国では、何をしたらよいのか、社会性をもてずに悩んでいる若者が増えている。このような若者が、自分の道を見つける場所が学校であり、学校の一つの重要な役割である。これは目に見えない、数値化できない問題である。

建学の精神である「力の教育」は、「知の力」、「情の力」、「意の力」、「軀幹の力」であり、すなわち全人教育である。この力を社会のために正しく使うことができる「力の漲った人を育てる」ことを建学の目的としている。この建学の精神のなかで、大変すばらしいと思うのは、知情意に「軀幹の力」が加わっていることである。身

体が脳活動に及ぼす様々な影響が明らかにされつつあることを考えると「知情意体」に一体化したことは驚異で
すらある。

知情意といえ、私は夏目漱石の草枕にある「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮
屈だ」を思い出す。ちなみに夏目漱石は今年没後一〇〇年で、帝塚山学院発足の年である。哲学は全くの門外漢
であるが、元々知・情・意は、哲学者カントが提唱したといわれており、人間の精神は、「知・情・意」の三要
素で決まるといふ。脳にあてはめると、知は大脳新皮質で知性、理性、情は大脳辺縁系で喜怒哀楽、意は前頭前
野で認知、意志決定といったらよいのだろうか。

脳はもちろん重要であるが、それを支えているのは身体である。脳は身体に様々な指令をだし、人間全体を統
一している。しかし、脳は多くのエネルギーを消費するのに関わらず、脳にはエネルギーの蓄えもなくすべて身
体からの供給に頼っている。また脳にある情報伝達物質はすべて消化管にも存在し、脳と身体が同等であること
がわかる。知識一つとっても、頭だけで「知識を理解する」というよりも、体を使った学びにより、知識をより
深いところに「身につける」あるいは「腑に落ちる」。人間を考えると、知情意でなく、知情意体とすること
は極めて意義深いと考える。

カントの知・情・意に対応する問題は、「私は何を知りうるか」、「私は何をなすべきか」、「私は何を望んでい
るか」であったという。これは前述した青年期に学ぶべきことに相当すると考えられる。

これらの諸問題について思索し、脳と同時に軀幹を鍛えて初めて、「力漲る」人になっていくことができる。

これが建学の精神に対する私の今のつたない理解である。

もう一度この建学の精神の旗を高く掲げよう。

凡 例

一、本書は『帝塚山学院大学五〇周年記念誌』として、一九六六年(昭和四十二)四月に開学した本学五〇年の歴史を記念し編集したものである。

一、本書は二部構成とした。第一部は「五〇年を映す『言葉の鏡』」と題し、理事長・学長・教員・職員・学生ら本学関係者の「言葉」を収録し、五つのテーマを掲げ本学について綴った、いわば「特論」である。第二部は「未来を拓く 大学がたどった五〇年」と題し、『帝塚山学院一〇〇年史』(二〇一六年三月、学校法人帝塚山学院発行)より、大学に関わる記事を「通史」として再録した。

一、巻末に歴代学長・副学長在任一覧、狭山キャンパス・泉ヶ丘キャンパス立体図を掲載した。

一、本書の編集は「大学五〇周年記念誌編集委員会」が行った。詳細については「あとがき」を参照されたい。

一、本文の表記は、原則として現代かなづかい、常用漢字を用いたが、人名・地名などの固有名詞、引用文、記名記事などにおいてはこの限りではない。

一、資料や文献の引用・再録においては、明らかな誤りとみなされる箇所は修正し、数詞などの表記や体裁を調整・編集して掲載したところもある。

一、本書は、学内資料である『帝塚山学院大学通信』から多くを引用した。その際、文中では『大学通信』と略して表記した。

一、第一部のうち「――言葉でたどる半世紀――」は次のように編集した。人名については可能な限り所属・職務を付記し、学内関係者は敬称を省いた。学生については、所属学科の前に入学年度を付し、西暦年の下二桁で表している。学科名は、以下のように略した。

日本文学科Ⅱ日文 英文学科Ⅱ英文 美学美術史学科Ⅱ美学 国際文化学科Ⅱ国際
コミュニケーション学科Ⅱコミュニケーション 人間学科Ⅱ人間 文化学科Ⅱ文化
食物栄養学科Ⅱ食物栄養 情報メディア学科Ⅱ情報メディア

帝塚山学院大学五〇周年記念誌 目次

もう一度、高く旗を掲げよう

学長 津田 謹輔

第一部 五〇年を映す「言葉の鏡」

——「言葉」でたどる半世紀——

| | |
|--------------|----|
| はじめに | 4 |
| 序章 ルーツ | 5 |
| 第一章 こだはらの丘で | 9 |
| 第一節 文人集う | 9 |
| 第二節 書を愛し | 13 |
| 第三節 世界を見据えて | 18 |
| 第四節 「お花畑」 | 25 |
| 第二章 二学部体制へ | 30 |
| 第一節 「実学」を求めて | 30 |
| 第二節 IT時代を拓く | 33 |
| 第三節 「心」の学び | 38 |
| 第四節 食を育む | 41 |

第三章 体を鍛え、心を磨く……………45

第四章 地域に根ざし……………49

— われら 一期生 —

日本文学科……………55

英米学科……………58

美学美術史学科……………63

— 忘れえぬ出会い —

心の扉——心理学科の今、昔、これから 副学長・人間科学部教授 西川隆蔵……………68

庄野英二先生と私 人間科学部教授 彭佳紅……………73

— 学長が語る 帝塚山学院大学の昨日・今日・明日 —

第七代学長 山田博光……………84

第一一代学長 酒井信雄……………87

第二二代学長 津田謹輔……………91

——小粒でもキラリと光る大学——

帝塚山学院大学創立五〇周年の転機に 野村正朗理事長・学院長が語る …… 96

第二部 未来を拓く 大学がたどった五〇年

——帝塚山学院大学五〇年の歩み——

第一章 誕生と発展 …… 104

第一節 学院半世紀 帝塚山学院大学誕生 総合学園が完成 …… 104

第二節 準備に動き出してから六ヶ月半で大学設置許可申請 …… 105

第三節 豊かな一般常識、人間としての教養の向上をはかる …… 107

第四節 新しい大学をめざし本格的な一歩 …… 108

第五節 最初の卒業生一七六名巣立つ …… 110

第六節 キャンパスの緑化 …… 111

第七節 飛躍と発展の時代を迎える …… 114

第八節 新しい図書館の誕生 …… 121

第九節 新しい時代への模索 …… 127

第一〇節 大学の現状と改革の基本方針・主要課題・方向と対策 …… 130

第一一節 不安をかかえながらの臨時定員増 …… 135

第一二節 「人間文化学部」新設 一学部体制へ …… 138

第一三節 共学化問題と「文学部再生のビジョン」 …… 140

第一四節 大学同窓会が船出 …… 149

第二章 国際理解・国際交流

第一節 国際理解教育研究所

第二節 国際理解研究所

第三節 国際女子の育成

第三章 二一世紀の帝塚山学院大学

第一節 学部再編と共学化

第二節 大学院の設置

第三節 教養教育に新たな試み

第四節 文学部の改革続く

第五節 キャリア支援体制の強化

第六節 食物栄養学科誕生

第七節 大阪狭山市と生涯学習推進に関する協定を締結

第八節 文学部の男女共学と大学院の充実

第九節 西日本初のリベラルアーツ学部と二学部四学科体制

第一〇節 教育開発・支援センターの開設

第一一節 南大阪地域大学コンソーシアムと大学コンソーシアム大阪への参加と連携

第一二節 激動期迎える大学

第一三節 大学の国際理解・国際交流

歴代学長・副学長在任一覧

狭山キャンパス立体図

泉ヶ丘キャンパス立体図

あとがき

大学五〇周年記念誌編纂委員会副委員長 西川 隆 蔵